

カツオ インド洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*

管理・関係機関

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

最近一年間の動き

2004年の総漁獲量は53.1万トンとなり、最近5年間の平均とほぼ同様であった。2006年のIOTC熱帯まぐろ作業部会では資源状態の認識に変化が無く、資源的に問題があるとは判定できない。

生物学的特性

- 寿命: 6歳以上
- 成熟開始年齢: 1~2歳
- 産卵期・産卵場: 周年、表面水温24°C以上の海域
- 索餌期・索餌場: 周年、熱帯~温帯域
- 食性: 魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海獣、海鳥類等

利用・用途

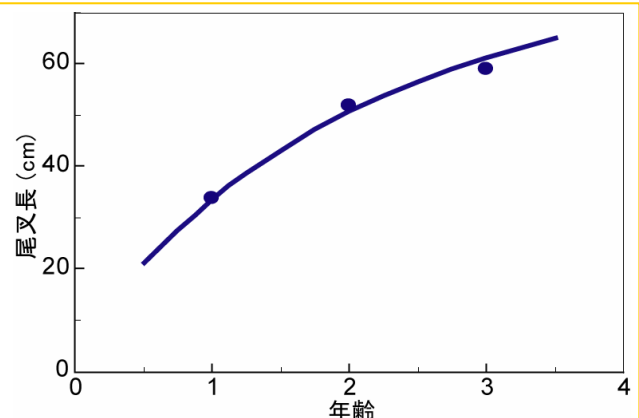
缶詰、かつお節、乾燥品などの加工品原料

漁業の特徴

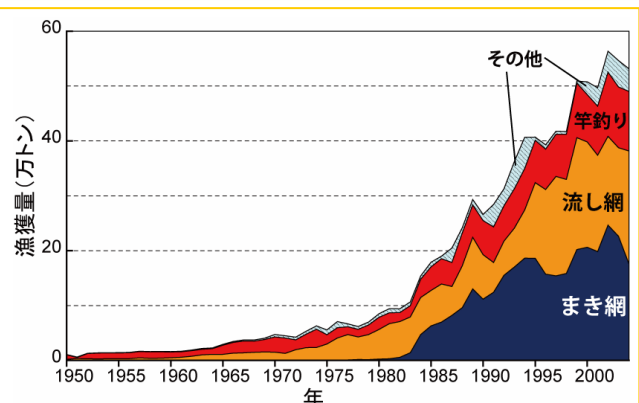
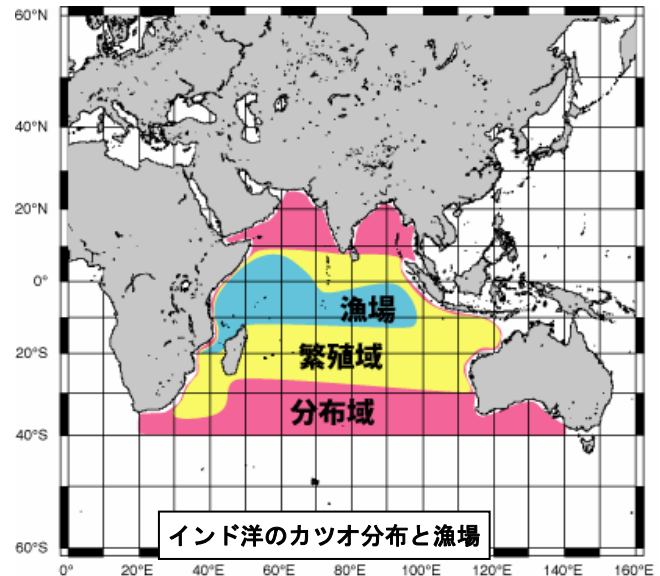
漁獲の約4割はスペイン・フランス・セイシェル等のまき網、約3割はインドネシア・イラン・スリランカ等の流し網、約2割はモルディブ等の竿釣りによる。まき網の漁獲増はFADs利用の影響が大きく、現在はまき網による漁獲の80%がFADs操業による。日本は1989~2001年までまき網の民間船が操業し、1992~1993年の漁獲は3万トンを超えたが、現在は水産総合研究センターの試験操業のみである。

漁獲の動向

漁獲量は1950~1982年は最大6万トン程度だったが、西インド洋でまき網漁業が本格化した1983年に10万トンを超え、1992年には30万トン、1994年には40万トン、2000年には50万トンを超えた。その後ほぼ50万トンを超える漁獲が続いている。



インド洋におけるカツオの成長 (Matsumoto et al. 1984)



インド洋における漁法別カツオ漁獲量 (データ: IOTC 2006)

資源状態

最近のまき網漁獲物サイズは、モザンビーク海峡でやや小型化した。全体では大きな変化はない。まき網の CPUE は、モザンビーク海峡を除き増加傾向にある。また、モルディブの竿釣りの CPUE も、近年増加傾向にある。これら漁獲物サイズ・CPUE の経年変化と漁獲量の推移を見る限り、資源に問題があるとは判定できない。

管理方策

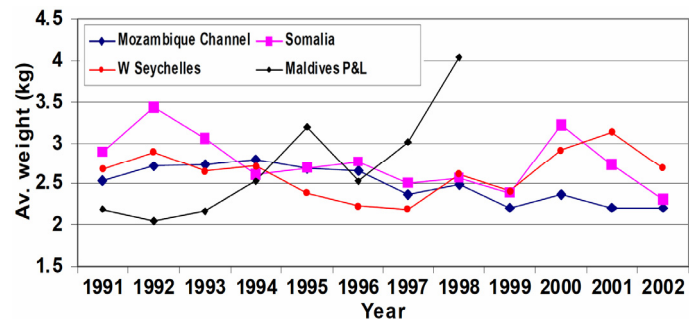
資源に特に問題がなく、管理策をすぐに考える必要はない。しかし、FADs 利用等の操業方法の変化で、狭い範囲に漁獲の集中が進めば、東部大西洋で可能性が指摘されているような漁獲物の小型化や漁獲の減少が伴う地域的な乱獲も起こりうるため、予防的な監視が必要である。また、2003 年 IOTC 年次会議で初めて本海域に保存管理措置として導入された全長 24 m 以上の漁船の総隻数等の制限等が、本資源の量に影響を与える可能性がある。

資源評価まとめ

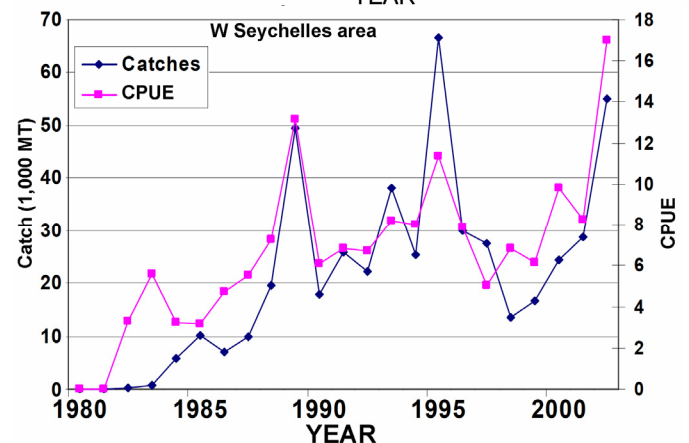
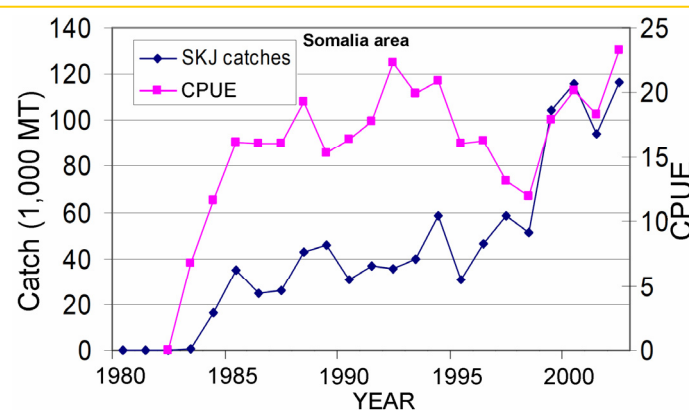
- 資源評価は IOTC により実施
- CPUE は一部漁業を除き増加傾向、漁獲物平均体重には経年変化が見られず、漁獲量は増加傾向
- 資源的に問題があると判定できない

資源管理方策まとめ

- 資源管理策は勧告されていない
- 狭い範囲への漁獲の集中による地域的な乱獲の可能性の監視が必要
- 大規模まき網漁業と伝統漁業の競合も問題視
- 2003 年 IOTC 年次会議で全長 24 m 以上の漁船の総隻数等を制限



まき網(モザンビーク海峡(青)、ソマリア(ピンク)、セイシェル西部沖(オレンジ))とモルディブの竿釣り(黒)で漁獲されたカツオの平均体重(IOTC 2003 5th WPTT Report 一部改変)



ソマリア漁場(下)とセイシェル西方漁場(上)のまき網の漁獲量(青)と CPUE(赤) (IOTC 2003 5th WPTT Report 一部改変)

カツオ (インド洋)資源の現況 (要約表)

| | |
|---------------------|------------------------------|
| 資源水準 | 高位 |
| 資源動向 | 増加 |
| 世界の漁獲量 (最近 5 年) | 49.7~56.3 万トン 平均:52.9 万トン |
| 我が国の漁獲量 (最近 5 年) | 1.4~2.4 千トン 平均:2.0 千トン |